

マハラジャのおかげで
自販機が増設された話

信州しなの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そこに不健康そうな奴がいたから

- ・コナンで書いていたおっさんオリ主が呪術の世界戦にいたらという話
- ・離反はしなかつたけど、けつたいな道に進んでいく夏油さん
- ・クロスではありません

※pixivに掲載しているものを持つてきました。

作者の名前が多少違いますが、執筆者、投稿者ともに同一です。

目 次

そいつはボロいビルを買った大富豪だつ た	1
誰もが被害者	1
これは買収ですか？いいえ寄贈です	9
15	1
今僕には理解らない	1
あの人に似ている	1
道を外していく	1
こちらのカレーは、あちらの先輩から新 入生へのサービスです	50 39 29
離反と忍殺と新作カレー	1
あれから	1

そいつはボロいビルを買った大富豪だつた

オフィス街から外れてはいるものの、都心に程近く、多少は歩くものの駅からもそう遠くない場所に、古いビルがあつた。昭和のいつだつたかに建てられたビルは元々、和菓子屋だつたそうだ。どこの家業にもよく起ころる後継者問題の末に閉店し、店主夫妻も亡くなつたことで空き家となつたが、更地にする程の財力は遺族にく、そのまま売りに出されたもののなかなか買い手が付かず早幾年。

最初は近所の悪ガキどもの、ありもしない嘘だつた。あそこのビル、頭のおかしいじいさんがばあさん殺して血を菓子に混せて売つてたんだつてさ。そういう趣味の悪い嘘だ。だが子供は謎の伝播力を持つ。ネットどころか携帯電話など無かつた時代に、ゲームの名人が逮捕されたというデマが、どういうわけかほぼ一日で国内の小学生の共通認識となつたように、一瞬で地域の子供たちにとつての『常識』となつてしまつたのだ。

別にだからといつて大人はそんなもの気にしないし、そんなの嘘だといふことも知つてゐる。なんならおじいさんの方が早くに亡くなり、おばあさんが喪主の息子の横で慰問客の相手をしていたことだつて、大人たちは知つていた。

でもそれは、昔からこの近辺に住んでいる人限定で、人の出入りが激しい集合住宅も多数存在することから、やがてその間違った認識は新規の大人たちにとつての常識になつた。

そんなビルとはいえ、買い手が付かなかつたのは陰湿な噂の為ではない。微妙すぎる大きさのビルだつたためだ。

もう少し広い土地のほうがとか、逆にここまで広さは要らないとか、これだけ古いと立て直しだから資金がだとか。そういう現実的な問題で空白となつていたに過ぎなかつた。

だけど、子供が暇つぶしに流した嘘が、そのビルに住み着くようになつてしまつていった。

「オー。オーモ・ムウーキイがあるね」

「ええつと。築年数はまあ、そうですね。50年は経過していますね」

「イイヨイイヨ。マスタル古いもの使うのも慣れてるヨ。ここ買う。鍵よこせ」

「あ、はい。どうぞ。えつと、本当にいいんですね?」

「お金払つたしマスタルのだよ。あげない」

頭にターバン、どこのリサイクルショップで発掘してきたのか聞いたただしたくなるイ

ンディーズバンドのライブTシャツ、よれたグレーのチノパン、一体どこの靴屋に行けば買えるのか不明なゴムなのかプラスチックなのかよく分からぬ茶色の一体型サンダル——いわゆる便所サンダルを履いた、あからさまに演技だと分かるイントネーションのおつさんが、不動産屋から鍵をふんだくると、意気揚々と赤茶色をした古いアルミサッシの玄関をガチャガチャとやつた。

一応引き渡しのために不動産屋が居たものの、もう帰つていいと言つて追い払つたため、現在は無精ひげに白髪を混ぜたおつさんがひとりだ。

「ソソソ、ダストが豊富！」

おつさんは日本式に靴を脱ぐなんてことはせず、埃の積もつた店の中も居住スペースもサンダルで歩いた。歩くたびに埃が舞う。ターバン脱いでマスクにしようかな。誰も見てないし、いいだろうか。でも巻きなおすの面倒だからとそのまでいることにしだとうせぐるつと見て回つたら、今日はもうホテルに帰るつもりでいたからだ。

安物の生地の伸びたライブTシャツはお約束のように黒なせいで、埃がつくとひどく目立つたが、彼は気にすることなくひとつずつ扉を開けたり、ボロきれと化したカーテンを摘まみ上げてみたりと、屋根裏探索に勤しむ少年と同じ行動を全力で楽しんでいた。

が、なにか変な部屋がある。どうにもそつちに行きたくないのだ。見た目はさつきま

であつた木目調の扉と変わらない。だが、なにか。ずるつと背中に直接貼りつくような嫌な汗が、埃塗れの服を肌へと密着させる。

「……、……」

彼はドアノブに手を伸ばす格好のまま停止した。手に掛けることも、ここから離れることもいけないようだ。扉の向こうに大口の蛇が待ち構えているような、背後から毒蜘蛛が忍び寄っているような、もしかしたらその逆なのかもしれないが、とにかく嫌なものの、それも命を奪いそうなものが近くにいるような感覚がするのだ。

護衛はいない。非力な使用人たちもここにはいないのは、不幸中の幸いか。彼は今ひとりきりだ。

色々なことが頭を駆け巡る。

はじめて師と出会ったときの感動。妻との結婚式。ふたりの息子の誕生。夕暮れの海、飛行機の中で寝違えたこと。子供のころ好きだった物語。昨日笑いあつた友の顔。

「大丈夫ですか!!」

そんな駆け巡った記憶は、その言葉で霧散した。

黒い髪の毛をまとめた男……いや、彼の年齢からすれば充分に少年。なかなかの高身長に、焦つて来たのか額に汗が浮かんんでいる。

何が起きたのかは分からぬ。分からぬが、とにかくナニカが解決したのは理解し

た。

そう、それはきっと、乗り込んでまで来てくれたこの少年のお陰なのだ。

ならば礼は尽くさねばならない。でもその前に思つたことを伝えることにした。

「スッゲエ。ニンジャ？ 貴様ニユージェネレーションニンジャ？」

「えつ……？」

「アイアムヨーガマスター。宜しくしろニユージェネレーションニンジャ」

「いえ、違います。忍者じやないです」

これが夏油の人生を根底から覆す出会いとなつたなんて、いつたい誰が予想出来ただろうか。

□□□

たまたまそのビルの近辺での任務があつた。本当に偶然だつた。

なんとなく自分の足で帰りたかつたからそうしただけで、深い意味も無かつた。
しいて言えば本屋にでも寄ろうかなとか、その程度だつた。

だが、突然感じ取つた身に覚えのあるというよりも、つい先ほどまで対峙していたそ
いつらと似通うあの独特な気配に足を止めた。これは、2級かそれ以上だ。それがいき

なり活性化するなんて、絶対にろくな事が起きているはずがない。

その心のままに走り出し、古い小さなビルを目にしたとき、ここだとはつきりと理解する。

肝試しなのか、廃墟探索なのか、風雨をしのぎたくて入り込んだ人物か。とにかく『誰か』が中に入つたため、餌が来たとばかりに動き出したのだろう。

自分が気が付いてから、そう長い時間が掛かつたわけではない。が、どんなに急いだところで見えない人間にはその脅威は見えないし、訓練を積んでいない人間はとつさにすべき動きを取れない。

古い汚れた曇りガラスをはめ込んだ引き戸は鍵がかかっておらずすんなりと勢いのまま開き、手持ちをいくつか出しながら気配の濃い上の階へと駆け上がる。

走つた先にドアノブを掴もうとして固まる老人がいた。彼の顔は何かに気が付いているようで強張つてはいるものの、諦めた顔もしておらず、何とか最善策を取ろうと摸索しているようにも見えた。

老人の背後には、不快な音を発しながら何本もの歪な腕を持つ呪霊が、老人が動くのを待ち望むようにしている。条件発動というより、老人を甚振ろうとしているようで、舌打ちが出た。

そういう意味では老人が下手な動きを見せずに硬直していたのは、正解だったのだろう

う。

扉の向こうにも気配がある。

呪霊たちは餌と扉を挟んで牽制でもしあつてゐるのか、甚振りあつて楽しんでいるのか。とにかく動きがあつてからでは遅い。出しておいた呪霊を先行させて攻撃を仕掛け。更に廊下の奥へと向かつた呪霊たちを今は無視して老人の肩を引いた。

「大丈夫ですか!!」

老人は顔色を悪くしつつもしつかりとした意識があるようで、すぐに顔つきが変化していく。それはこちらに対しても害意があるものではなく、状況を冷静に判断できる知性のある顔だった。こういう的確な判断と状況対応が出来る人間は話が早いし、任務の後に仕事を追加したとはいえた後はそんなに苦労しなさそうだな、なんて考えがよぎった。

そんなものは全くの幻想であつたとは、いくら他者より人生経験が豊かであるとしても、まだまだ少年の枠である彼——夏油傑には分からなかつた。

「スッゲエ。ニンジャ？ 貴様ニユージェネレーションニンジャ？」

「えつ……？」

この老人は何を言つてゐるのか。さつきまで死に晒されつつも状況を打破すること

を諦めていなかつた目をした、意志の強そうな鋭い顔つきはどこへ行つたというのか。「アイアムヨーガマスター。宜しくしろニュージェネレーションニンジャ」

「いえ、違います。忍者じやないです」

新世代忍者とか言われたのは、生まれて初めてだな。

常に頭の片隅に冷静な判断能力を残すように努めている自分の努力が、こんな形でしつペ返しをしてくるなんて。

気になることは色々あれど、とりあえず夏油傑は忍者を否定した。

それだけは否定しておきたかつたから。

誰もが被害者

その日、東京都立呪術高等専門学校の事務に一本の電話が掛かつてきた。

やつてる事は非合法では無いがアレな感じのお化け退治とはいえ、事務方に電話くらい日々掛かってくる。仕事上必要なやりとりならまだしも、面倒極まりないクレームだつたら嫌だなど電話を取つた事務員だが、その時点でなにやら嫌な予感がした。

こういう仕事だ、事務方とはいえそれなりに勘は働きやすい。

「はい、こちら呪術高専東京校です」

『お忙しいところ失礼致します、わたくし、外務省のナカムラと申します——』

「……はい』

電話を取つた事務員は、過去最大の厄介ごとの訪れを確信した。

ナカムラと名乗る人物曰く、日本のインド大使館からそちらに連絡を取りたいとのことであつた。

何がなんだか分からぬが、聞き出せる範囲のことを聞き出した事務員は、これは自分の手ではどうにもならない事だと判断し、上司にも相談したうえで、多分犯人と思

われる人物の担任に話を持つていくことにした。

疑惑の人を受け持つ、厳つい顔にサングラスを掛けた夜蛾は、事務方が出した答えと全く同じ答えを出した。

きっと五条悟関係。間違いない。確信している。

入学以来、色々やらかしはしてきたものの、国際問題を起こすことはなかつた。なかつたが、時間の問題であつたのか。

悲嘆に似た苦痛を抱えながら、夜蛾は担任として、大人として、彼を普段全く使わざれない、ただの空き部屋と化している生徒指導室に呼び出した。

容疑者にだつてプライバシーはあるし、守られるべきだし、何より色々事が大きそうで防音防諜がしつかりしている部屋じやないと怖い。

「今朝、インド大使館からニュージェネレーションニンジャについて問い合わせがあつた。悟、悟……お前は一体、インド領のどこを空爆したんだ？」

「なんて？」

面倒に思いつつも、思い詰めたような夜蛾の顔に、もしや実家関連かとしぶしぶ生徒指導室についてきた五条悟は、いきなり起きててもいい空爆テロという、架空の国際テロ容疑を担任からうけた。

しかも意味不明な忍者容疑まである。とても冤罪。

確かに彼は年齢の割に幼い悪戯も好きだし、なんなら術式だつて使つて悪戯もして
きた。

だからといつてインド領を空爆とかしない。もはや呪詛師とかどうのではない。
国際犯すぎる。秘匿死刑どころか大々的に死刑になるやつである。

「え、どういう意味……？」

「なら、ハイ・カーストの娘に手を出したのか？まさか、妊娠させたのか！？」

「はあ！せんせー俺の遺伝子の価値分かつてる？自分でするのにすら色々制限あるんだ
ぞ！」

「これ程童貞である事に安堵を覚えた生徒がいるとは……！」

「なに人が童貞なこと喜んでんだよ、呪術師とはいえイカレてるにも程があんだろう！」

とてもデリケートな内容ではあるけれど、実際問題あまりに希少価値が高いので、
恥ずかしいだと見栄だとか言つてられない。五条はその辺をしつかりと、それはもう
競走馬よりもしつかりと管理させていたし、エグすぎる話も幼少期から聞かされて育つ
てている。

だからと言つて、担任に呼び出されたと思つたら、起きてもいない国際テロ犯扱い
されたり、童貞を喜ばれたりと、かなり気の毒な状態なせいで心が重症である。
普段の行いが巡り巡つてとはい、あまりに酷い。

「じゃあ誰がニュージェネレーションニンジャだと言うんだ……お前以外心当たりがない」

「そのクソヤベエダサ称号、俺にあると本気で思つてんの？」

「……」

「割と本気で泣くぞ」

本気で心当たりの無い五条の様子に、テロもお手付き騒動も新世代忍者も冤罪であると発覚し、夜蛾はその辺は素直に謝った。誠心誠意謝った。

いくらアレな生徒とはいえ、思い込みは良くなかった。

が、思い込まなくとも現実にインド大使館からコンタクトを取りたいと言わればいるわけで、そのうえ謎のクソダサ称号を持つ誰かが高専に所属していることは確実なのだ。

こう言つてはなんだが、五条の嫡男が被告の方が色々丸く收まりそうであつたし、絶対にコイツだと事務含めた全員一致の根拠のない確かさがあつた。

では、誰が容疑者なのか。

緊急職員会議が開かれ、まずは生徒を学年ごとに確認する事で意見が一致した。高専所属の成人した術師ひとりひとりに、『あなたはニュージェネレーションニンジャで

すか?』なんて聞いて回れば、呪術師みんな転職してしまう。

会議でも当然の如く五条が疑われたが、大規模なテロがインド領内で起きた事実はない。彼は無実であると夜蛾は主張したし、無実の証明の一環として、ここでも生徒の童貞が広められた。

デリケートな年齢と相まって、実家の蔵に引き籠もられて致し方ない話だ。大人でもきつい。

そうして迎えた各学年一斉の緊急ホームルーム。

酷すぎる冤罪を吹っかけられた五条はムスッとしつつも席についていた。まだ一年も一緒に過ごしていないとはいえ、クラスメイトに対する信頼はある。こいつらはあのクソ称号持ちではないと思っているし、担任だつてそうだろう。だからといって自分が疑われたのは腑に落ちないが。

「……単刀直入に言う。この中にニュージェネレーションニンジャはいるか?」

家入は現在吸っていない煙草の煙を盛大に吸い過ぎたかのように咽せた。とても仕方ないが、止まらなくて苦しげだ。机に握り込んだ右手を乗せ、左手で口元を覆つているが、なかなか止まらなかつた。

それに気を取られている教師と友人を横目に、夏油はとても焦っていた。
否定したはずの過去が残酷な形で襲つてきてる。

出来れば無かつたことにしたいというのに。自分でやらかしてないのに黒歴史。

善行積んだのにこの有様。彼の顔色と心は白くなつていった。

「げは、ごほ……つ！ んぐ、ぐ、……ひい」

家入の咳は笑いを噛み殺すものへと変化した。このクールな女子生徒がここまで笑うのを、夏油は初めて見た。が、ネタ元が自分。とても自白しにくい。

「……なあ、傑。お前、震えてんぞ」

「……」

サイレントに震えていた夏油は、もはや冷汗とともに蒼白に震えていた。

「まさか、すぐる、おまえ……」

言わないでくれ、頼むから。

友人の言葉の続きを聞きたくないし、友人の方も見たくない。視線が集まるのが恐ろしくてたまらない。

「お前が、ニュージェネレーションニンジャ……？」

神は死んだ。

夏油傑は無神論者であつたが、確信した。神様なんてとつぐに死んでる。それか正体が呪霊。それなら仕方がねえ。

これは買収ですか？いいえ寄贈です

東京校忍者エボリューション騒動も收まり切らぬ翌々日。被疑者なのか被害者なのか曖昧な夏油は、クラスメイトや担任、学長その他を引き連れて門の前に待機していた。

今日、主犯がやって来るためだ。

通常、いくら助けられたからといって、呪術関係者でない人間がここへやって来ることはない。しかしやって来る事になった。

なぜなら伸びた聞いたことないインディーズバンドのライブシャツを着ていたおつさんの正体が、インドのハイ・カーストだったからだ。それもやべえ領主レベル。つまりはマハラジヤ。文句なしに国賓である。

大使館から外務省を経由して面会を希望されてしまつては、流石にダメとは言えない。高専の呪術師は囑託的な公務員のようなものなので、国がでつかい圧を掛けてきたら抵抗のしようがない。

外務省からも大使館からも国際問題をチラつかせられてないのに、がつり国際問題になりそうな気配が漂っている。

自分の善意が呪術界どころか日本の安寧やら世界の安寧を揺るがしかねなくなるとは思わなかつた夏油は、一昨日頭を抱えながら夜蛾に事の内訳を語つた。第二次生徒指導室内取調べである。

「まさか、あんな老朽化したビルの中に、インドの大富豪がひとりでいて、呪霊に襲われているなんて……」

「大使館からの情報とこちらの調査によれば、あのビルを買い取つたところだつたみたいだな……」

「買う場所、品川と間違えてませんか?」

夏油はすかさず突つ込んだ。どう考へても大富豪が買う場所じやない。

イメージでしかないけれど、そういう富豪は高級住宅街だと、地価が1平方メートルで7桁だと、そういう場所を買うのではないのだろうか。もしくは別荘地。鎌倉とか、軽井沢とか、そういう。

「……マツサージ店を開くためだそうだ」

夜蛾は夏油の問い合わせ意図的に無視した。

生徒の疑問にはなるべく答えたいが、世の中には訳の分からぬことが沢山ある。

なんで労働と無縁な一生を約束された人間が、呪霊が棲みつく程にボロい中古のビルでマツサージ店を営みたいのだとか。考へても分からることは、山のようにある。賞金付きの数学の懸賞問題だと思つて、分からぬなら理解を放棄して理解出来そな奴に任せればいい。

「それは、その。実際はなんらかの取引所を意味する？」

「違う。彼自身がマツサージ師として働くためだそうだ」

若さと根の真面目さが仇となつて、理解しようとする生徒の顔から諦めの色が浮かんでいた。

それはきっと、自分もそうなのだろう。夜蛾は鏡も見ずにそう思つた。

兎に角なんでだとかどうしてだとかを放棄して、単純に考えると国賓級の要人の危機を夏油傑は救つたのだ。

その礼を直接したいと。

あの時、特に自分の所属や何が起きたかは伝えず、もう大丈夫だということだけを伝えて夏油は逃げた。

初対面なのに新世代忍者扱いしていくる、明らかに日本国籍でないおっさんに絡まれ

たら誰だつてそうする。

そのおつさんがとんでもない大物だつたなんて、その場で分かるはずないし、コネとツテを最大限に使つて接触してこようなんて思わない。しかもヒントワードがアレ。

おかげで夏油は会話をしたことのない人物たちからも『あれがニュージェネ忍者』、『今年は五条悟のほかにも忍者が入学していた』、『外国人を忍者で騙した詐欺師』などといふ、誤解と偏見と曲解が混ざりに混ざつた好奇の目に晒された。

なお同期たちからはクソほど笑われたし、同性の同期からは怒りの籠つたパンチを食らわされた。

彼は決して語らなかつたが、相当な二次被害を食つたようだつた。

夏油は何も悪くないはずなのに謝罪する羽目になつた。殴られたのに。これらの出来事により、少年の岡太くも纖細な心は非常に傷ついた。ストレスは胃にも髪にも影響を与えたのは、若さゆえの救いだつた。

とても気分の悪いまま無言で門前に佇んでいると、先導の黒塗り外務省ナンバーのセダンのあとに、黒塗りの高級車が複数台やつて来た。天使のエンブレムの高級車だ。4台存在している。

これ知つてる。大統領とかが、本命の乗つた車を分からなくさせるために複数台同

じ仕様の車を出すやつ。そしてその後に大型トラックも複数。

夏油は何も考えずにベッドの上で寝なくなつた。出来れば寮じやなくて、慣れ親しんだ実家のほうで。

絶対に吊り下げ品じやない黒スーツとサングラスの屈強な男たちが先に降り、彼らに囲まれるようにしてひとりの老人が門前に立つた。

服装がとつてもマハラジャしてる。最初からこれだつたなら対応を間違えなかつたんじやないかと思えてならない。

老人は鋭い顔付きで門前に並ぶ呪術師たちを見たと思つたら、夏油を見て口角を持ち上げてみせた。獲物を見つけたマフィアのドンみがある。

「よう二ンジヤ。再会したなニンジヤ！」

あの日と変わらない中身のジジイがそこにいた。膝をつきくなつた。やめろ。こつちに手を振らないでくれ。頼むから。もういいから。だから寄つて来ないで。にこやかに肩叩かないで。お願ひだからハグしないで。やめて髭がちくちくする。やめて。

ところ変わつて応接間。人口密度がたつけえが、応接間である。

呪術高専側は学長、担任の夜蛾、そして夏油。

来賓は複数名の護衛と、お付きが数名、そして唯一座るおっさん。密度的に会議室とか空き教室の方が適しているが、相手が相手なせいで出来ない。

おっさんに促されて夏油たちも腰掛けたが、正直座つている気がしない。空気椅子に座つているかのような心地しかしなかつた。

「この前アリガトネ!」

「いえ、当然のこととしたまでです」

とてもテンプレートな事しか言えないが、テンプレートが出て来ただけでも充分すぎる解答である。

「それよりニンジャ!元氣にしていたかニンジャ!疲れた顔だなニンジャ!ニンジャもロードウーランサだから疲れてる?分かった横なれマッサージする」

「えつ!?いや、忍者じゃないです!!忍者じゃないですし、國賓にそんな……」

「ヨーガマスターお忍びだから問題ナイヨ」

「外務省と大使館から連絡が来るお忍び……?」

だがテンプレートが使えたのは、ほんの一瞬だけであつた。社会の荒波つぶりが冬の津軽海峡なみ。

マツサージするしないの押し問答をしていいのか悪いのか。というか、既に幾つも死線を搔い潜ってきたとはいえ、この空氣の中でマツサージを受けるクソ度胸はまだなかつた。

「ウーン、仕方ネーナ！また今度来る」

来なくていい。

東京校側の人員の心は、年齢も立場も超えてかつてないほど一致した。

「今日はお礼しに来た。礼の品もある。たくさんあるから目録もあげちゃう

「ありがとうございます……？」

「若いミソラで労働して。マスタル働いたことないけどこれから働くからロウドワー
シヤ仲間になる。あはははは」

「はは、は？」

これは、何系のジョークなんだろうか。

救いを求めて横に視線を投げかけてみても、担任は微動だにせず前を向いて座つて
いた。大人の汚さではなく、彼にも何も分からるのは手に取るように分かつた。

「また来る楽しみにしてる」

そう言うとさっさと立ち上がりて扉の向こうへと消えていった。唖然とし過ぎていて、誰も見送りだとか別れの挨拶だとか出来ていらない。

護衛も使用人も慣れたものらしく、ぞろぞろと消えていった。

最後の使用人が丁寧に一礼を添えて扉を閉めたとき、やつとまずい事に気がついた。

「先生……名乗るのを忘れていました」

「それは、向こうもこちらも全員そうだ」

そう言われて初めて、こちらの自己紹介もおっさんの自己紹介も無かつた事に気がついた。

夏油の頭の中に国際問題という言葉が現実味をもつて浮かんだ。高専最後の日とかいう不吉な言葉が過ぎつたけど、旧体制がやべえので一度解体した方がかえつていいかもしれない。人はこの思考を現実逃避という。

沈黙の中、秘書と思わしき使用人が置いていったテーブルの上に置かれた目録の主張がとても怖い。

「……目録どうします？」

「確認しないことにはな。とはいえ我々にはそれを本物かどうか判断できる審美眼がない。丁度いい目を持つ奴を連れて来る。先に講堂に向かっていてくれ」

さり気なく押し付けられた目録を手にし、夏油傑は今度こそ大人の汚さを知った。

講堂には山のような荷が積み上がっていた。

文字通り山。目録に視線を移せば、なんか分厚かつた。ハードカバーの冊子が目録。つらい。これを確認しなきやならない。つらい。

「ようニユージェネニンジャ」

「やめてくれ」

「うわニンジャの目が死んでる」

「やめてくれ」

六眼式審美眼を備えた友人が呑氣な足取りでひでえことを言いながらやつてきただ。

人の心の傷に塩どころかガラムマサラを塗り込む所業である。とてもスペイシー。これだから呪術師性格がアレ。

「やべーな、昨日の今日でどうやつて運んできたんだコレ」

これには夏油も無言で頷いた。分量的に海運じゃないと難しそうなのに、どう考え

ても海運でどうにかなる日数じゃない。

夏油が自称ヨーガマスターを救出した直後から運び出したとしても間に合う気がしない。何をしたんだ。

「金銭による『寄付金』は小切手を渡された。が、これは日本円なんだよな……?」

向こうで大人の汚さを見せつけてくれた担任が、学長と死にそうな顔で会話をしている。

時折、これは年間国家予算なのではとか、小国が買えるとか聞こえてくる。

その金で何をさせる気なのだろうか。まさか校内にタージマハルでも建設させるつもりなのだろうか。

ここも大概宗教施設じみた様相だが、ほぼハリボテだ。本物なら世界遺産になつてそうな規模と格式だけど、ハリボテだ。ハリボテの中に本物の世界遺産を作らせる気なのか。

呪術師の総本山が観光名所になつてしまふので、規模のデカすぎる建築物は切実にやめて欲しい。

それを尻目に五条ははしやぎ回っていた。

「うつわ、宝石に金塊に……あ!傑、すぐーるー! 見ろよ、こっちほぼ全部呪具!

うつつわコレ国宝レベルの呪具じやんウケるwwwwww」

夜蛾の判断はとても的確であつたようだ。

五条の長年磨き上げられた審美眼、ではなく六眼が光る。

お坊っちゃんなので審美眼も備わっているだろうけど、審美眼の方がおまけ。とても物騒な審美眼だけど、この度は大変役に立つ。

なにせ目録はヒンディー語と英語の表記ばかりで、日本語表記もあるけど、安っぽい輸入品に付いてくる説明書みたいな文法とかフォントとかが微妙に怪しいやつだったので。

急挿えの学芸員と化した五条は嬉々としてアレコレ解説してくれるけど、正直目録チエツクというより宝の山に浮かれてるだけだ。

洞窟オープソサミしたアリババ状態。とても楽しそう。肝が太くてなにより。

この太さのお陰で、常人なら寝込むレベルのひでえ冤罪でも不貞腐れる程度で乗り越えたのだろう。強い。

「……税関は何をしているんだ……」

夜蛾の呟きが重い。胃の腑に掛かる負荷をそのまま表現してる。

「うわ本物の仏舎利まである。ウケる。マジなやつ初めて見たｗｗｗｗｗ」
「本物、の、仏舎、利……？」

今にも召されそうな夜蛾と違つて五条はとつても上機嫌だ。それはそうだろう、仏舎利と呼ばれるものは世界に2トン以上存在するが、それらはほぼ全て偽物か宝石や貴石による代替品だ。

五条のお坊っちゃんでも本物は初。ちゃんと国内にも本物とされる仏舎利はあれど、貴重品すぎて厳重に封印されている。つまり現物をお目にかかる事がない。

やつたね五条くん、経験が増えるよ！

やつたね夜蛾くん、苦労が増えるよ！
もはや寄贈品が世界遺産。きつつい。

「これマジやべえｗｗｗこれ、その辺置いとくだけで東日本の2級以下の呪霊全部消えるぞｗｗｗｗｗ置き型の消臭剤かよｗｗｗｗｗ」
「悟、仏舎利を消臭剤扱いするのはやめるんだ。貴重な品なんだろう？」
「何言つてんだよ、消臭剤貰ったの傑だろ？」

一応寄贈先は呪術高専になつてているとはいえ、眞の持ち主は夏油傑である。

世界一高価で靈験あらたかな消臭剤（2級以下の呪霊が消える）。まさか自室のトイレに置いておく訳にもいかないし、インテリアとして飾るのも良くない。

「……夜蛾先生、名目ではなく、これらの所有権を全て高専に渡します。たまに呪具の貸出許可を出して頂ければそれで」

「……そうだな、個人で持つものじやないからな……」

「マスターは個人所有のようでしたけど」

「言うな」

この件により、夏油傑はわらしひ忍者の称号を手にすることになった。

なお後日マスターから郵送されてきたカレー屋のサービス券は、高専側に渡さず活用された。

とても美味しかったし、呪術高専はデリバリーラン外なのに対応してくれる事になつた。

最初からこれだけで良かったのに。

折角なので同期三人で一緒に食べに行つたときの紅一点の言葉は聞き流した。時に人は眞実から目を逸らしたくなるので仕方がない。

——
そうして暫しの平穏とカレーを味わっていたというのに、奴はまた来た。
複数の自販機を手土産に。

今僕には理解らない

自称ヨーガマスターが今度はアポなしで押し掛けて来た。

マスターはやつてゐる事や言つてゐる事が無茶苦茶なのに、苦労しか掛けられてないといふのに、何故か事務員たちから絶大な支持があつた。

なぜなら最初に訪れたあの日、勝手にお供を引き連れて校内探検をした折、事務員と数名の補助監督にマッサージを施して骨抜きにしていたからだ。

「マスターだつ！マスターだ!!」

「私です、ロウドウーシャです!!日々疲れ果てたロウドウーシャです!!」

「マスター！」

そのせいで、校門がハリウッドの大物俳優が来日した時の成田の様相を見せていた。彼らはみな疲れていたし、なんなら転職したかつた。どうせ転職するならサービス精神旺盛な太っ腹な富豪の元がいい。そんなとても素直な気持ちで自己アピールをしていた。

「一度に話すのNO、マスターはヨーガのマスターだけどショトク太子じゃない」
なんでお前が聖徳太子を知つてゐるんだ。お前の客扱いで呼び出された夏油は、たつた

今お腹を壊したことにして個室に籠城したくなつた。出来れば来賓が帰るまで。

「よう忍者スグル。自販機持つてきただぞ」

「……は？」

「お前ら自販機少ない言つてた」

「へ？」

そんな事、この人に言つたか？前回の面談を思い浮かべてみるが、ほぼマスターがひとりで喋つてさつさと帰つていつた記憶しかない。あの後山積みの贈り物の選別や収納に心身共に疲弊して、湯船の中で寝掛けたことは覚えているけど、こんな話はしていない。

「ホラ、カレー屋で」

「カレー屋!?」

まさか尾行なのか護衛のつもりのなにかなのかを付けていたのか？その疑問はすぐに解消した。

「マスターがオーナーしてるし、シェフはウチから連れて來た。美味シイ。ナンも美味しい。マスターの息子のナンは不味い。マスター命の危機感じたの、息子の何かを食べたときとスグルに助けられた時。ウーン感謝！」

「えつ」

自分の息子の手料理らしきものと、呪霊被害が同列。一体どんなものをこのおっさんは食べたというのか。人のこと言えないクソマズ物体を飲み込んでる夏油は、ちょっと冷静さを欠いていた。

「シェフとマスターなーかよし！子供の頃からなーかよし！喧嘩したときマスター、生ゴミのゴミ箱突っ込まれたけど仲直りシタヨー」

どんな喧嘩だ。ジャッキー・チエンが出て来るタイプの喧嘩か。そしてそれは仲がいいと言えるのだろうか。

彼には富豪の言うところの友情が分からなかつた。ただの殴り合いで済んでないが、仲は良好。わからない。国際感覚ではこれを仲良しと言うのだろうか。んなわけない。でも仲は良好。マスターは彼自身もその周辺も意味不明である。

「お店で自販機の話したデショ、シェフが聞いてた。だから持つてきた。使え」

「使え」

生徒の一存で使う使わないを決められるものじゃないだろう。

「マスターも使いたいし。ティーウィズミルク飲みたい」

お前も使うのか。使う予定があるつて事は、またここに来るつもりだと分かつてしまい、前髪を濡らしそうになつた。目から出た塩氣のあるやつで。

だが事務を味方につけ、運営側にも盛大に金塊殴りを決行した大富豪は強かつた。諸

手をあげて自販機の寄贈を歓迎され、その日のうちに設置されて回った。

だが、校舎一階の片隅に設置された自販機は他と一線を画していた。

どう見ても田舎の脇道にあるたまご自販機型。たまに野菜が入っていることもあるけど、あの小銭を入れて扉を開けて買うタイプの自販機。ちなみに冷蔵機能付きだつた。しかも割と大型。

一体なにを販売するつもりなのか。まさか呪具か。そんなものを自動販売機で販売してみろ、通りすがりの呪術師が二度見三度見ガン見を決めた後、バールでこじ開けて全部持つっていくに決まっている。もしくは、自販機を前に血で血を洗う戦いが起ころる。「マスター、それは何を売るつもりで……？」

夏油は恐る恐る聞いてみた。色々あつて対マスターの総責任者じみたポジションに落ち着いてしまっている現状、やべえ自販機が校舎に設置されるのだけは避けたかった。主に監督不行き届きで処罰を食らいたくなくて。

「これ？ カレー売る」

「カレーを売る」

都内でボロいビルを購入した富豪が経営している、潰れたコンビニを改装したカレーハウスのことを夏油は思い出した。

同期三人で行つた、サービス券の発行元である。異様においしいと思っていたら、本

日まさかのシェフがマスター専属だと判明した、あの店。

「毎朝うちの使用人が届けに来る。毎日カレーが食べられる。ラッシーとチャイも置いておくから飲め」

「あの、マスターがオーナーのカレー屋はデリバリーも対応してくれているんじゃ……」「してるよ？」

「え、じゃあ自販機は……」

「マスターがここ来たとき食べる」

「……そうなんですね」

通う気満々である。さつきも言つていたけれど、本氣で呪術高専に通い詰める気満々である。夏油は色んなものを諦めた気持ちを言葉に込めて返答した。

ここに非術師が通い詰めるつてどういうことだと思うが、なにせ寄付金も寄贈品もえぐい。多少の我儘が通つてしまふのだろう。

「マスターね、ここと契約した。週一でマッサージする。ひとり一回二千円。二千円持つて並べ。マスターが健康にしてやる」

「マスター……」

この人も方法は違えど、人を救おうとしているのか。夏油は感動した。

「そしたら一千円でカレーが買える」

「えっ」

「千円札使える自販機だから安心しろ」

「自分のところのカレーですよね……？」

ちよつと大富豪の考えることが理解できない。いや、理解できた試しなんてなかつた。一瞬感動した自分を忘れない。マスタルはマスタルだつた。意味の分からぬ存在だつた。

「お前もカレーを食べろ」

「いやそんな、美味しかつたんですけど毎日は」

「いいから食べろ」

夏油は毎日食べるなんてことに肯定はせず、曖昧に微笑んで流すことにした。

あれから、マスタルは宣言通り毎週水曜にやつてきてはマツサージをして帰るようになつた。そしてカレー自販機で稼いだ現金でカレーを買つているのを何度も見かけた。

自販機の横にしつれつと設置されていた電子レンジはカレー以外の温めにも活用されているが、業務用だということを知らなかつたお坊ちゃん五条は容器ごとカレーを溶かす失態を犯したが、夏油が危惧したほどの騒動は起きず、おおむね平和な時が過ぎた。

なお、五条は寮入りして初めて電子レンジを操作したので、業務用と家庭用のワット

数の違いについて知らなかつたため起きた悲劇であり、今はちゃんと学習している。彼は基本頭脳の出来が良く、何でもできるタイプなのに、世間知らずゆえのやらかしが多かつた。

めちゃくちゃ美味しい自販機カレーの競争率は異様に高く、設置したマスタル自身も買えないときがある。そんなときは高専に設置されている使用率が低すぎるピンク色の公衆電話を使って使用人を呼びつけてカレーを食べていた。

夏油はこのとき初めて、インド式弁当箱の存在を知った。ステンレス製の円形三段弁当である。最初からこれを持つてこいと思つていたら、インドでは一般家庭でもお弁当を後から運搬するのが普通と知つて啞然とした。

電車に大量の弁当箱を持つた運搬人が押し掛ける映像は、なかなかにカルチャーショックであつた。

そんなこんなで夏油自身もカレーを食べたり食べなかつたり、カレー以外にもラッキー やチャイを飲んだりしながら過ごしていただ訳だが、あるときふと気が付いた。

香辛料がもりもり入つているインドカレーなら、クソマズいアレを嚥下した後でも美味しく食べれるし、口の中にしつこく残っていた臭いも消えるということに。

彼は感動した。インドの神秘を垣間見た。インドの神秘というより単純にスペース

のござり押しながら、神秘ということにしておいた。が、だからといって自販機カレーは競争率が高いし、デリバリーも注文受付時間と配達時間が決まっていて、任務があつたりなかつたりする状況では安定して食べれない。

とはいえ流石に毎日カレーは嫌だ。飽きる。それなりに種類を取り揃えてくれているとはいえ、毎日はきつい。

それでも、食欲と後味の悪さをどうにかする方法を確立出来たのは大きかつた。奇しくも本日は水曜日。オーナーなのにカレー戦争に敗退したマスターが、例の弁当箱を片手に歩いているのに遭遇した。今日は午前中に任務に行つたので、黒々としていておつきい。アレを飲み込んだ後だつたのも手伝つて、とても元気が無かつた。マスターの相手はとてもスタミナを消費するので、出来れば気が付かないで欲しいと思つていたが、神様がとつくに死亡しているせいで、彼の願いはまたしても宛先不明扱いで手元に戻つて來た。つまり見つかつた。

「若い身ファ空シドのロウドウーシャ！マトンのカレーを食べろ」

「身空です。ファとシドは必要ないです。前言えてましたよね？」

……あの、マスター。カレーは美味しいけど、その。今日はカレー以外も食べたいと
いうか」

「何言うニッポンジン。お前だつて毎日ライス食う。カレーも毎日食べればいい。マス

タルのオベントひとつあげる」

「ラツシーも下さい」

とはいえ多少は耐性がついて、要求を言えるようになつた。ただしPPの消費が激しい。40くらい使う。とても頑張つているのに効果がいまいちなのが悲しい。

天氣も良く、気温も丁度良いということで、おっさんと青少年が屋外のベンチに並んでカレーを食べている。事案っぽいが健全である。おっさんの今日のシャツは嵐の中サーフィンをするネコチャンという需要の分からないコラ画像であつた。異様に似合つてゐる。

「マトンのカレー、初めてだけど美味しいです」

「そだろウメーだろ」

渡された繊細な装飾の銀製のスプーンの価格とかはあまり考えずにカレーを食べる。

今日もシエフのカレーは美味しい。

そうしているうちに食べ終えて、目上の人（兼パトロン）がいるので丁寧に手を合わせごちそうさまをして、ラツシーを飲む。程よい酸味と甘みが美味しい。これに追いシユガーキめる五条の味蓄については考えないものとして、隣を見ればおっさんもそろそろ食べ終わるところだつた。

見た目はアレだけど、この人もハイ・カースト出身者なせいか食べ方がきれいだ。

ここで夏油は疲れもあって、人生を左右する行動を取つてしまつた。

この人は、色々やばい人物ではあるけれど、自分には欠片も存在しない視点を持ち、自分と無縁であつた経験を持つてゐる。そう、自力では解決できない問題の答えを出してくれるのではないか、と。是即ち人生相談である。この時点で相当精神が追い詰められていることがわかる人選。苦労が偲ばれる。

「事情があつて、美味しくないものを食べる必要があつて。でも美味しくないものを食べた後、カレーを食べると味覚が正常に戻るんです。でも毎日カレーを食べるのは私は向いてなくて。一体、どうすればいいですか？」

マスターは弁当箱の蓋を閉めながら、夏油のほうを見もせず言つた。
「自分に合うカレーを調合しろ。宿題にする。スペイスはあるか？」

翌日、マスターから夏油宛にスペイスが届けられた。引っ越し用大サイズ段ボール
いっぱいに詰まつたスペイスである。

夏油の終わりなき戦いが始まつた。

あの人によく似ている

夏油は思い悩んでいた。思つたようにスペイスが調合できないのは、まあ想像通りだ。素人がやるには難易度がおかしい。いくら基本となる配合が長い歴史の上で既に決定されているとはいっても、自分好みとなると難しい。それは仕方のないことだ。

現在の主な問題は食べ比べていると差が分からなくなってくることだつた。スペイスの調合に必要と思われる、繊細な味覚というものが自分に備わっているとは思えないし、そういうものが必要不可欠だというのも理解している。

なのでやれそうなことに手を付けることにした。

まずは味覚に良いと聞くので、ドラッグストアで亜鉛サプリメントを購入した。買って帰つたら何故か担任に生徒指導室に連行される羽目になつた。第三次生徒指導室内取り調べである。

どうやら下半身の強化素材だと思われたらしく、素行調査をしたもののは乱れば見受けられず、一体どんなエクストリーム独り相撲をしているのかと疑われた。

とんでもねえ誤解と偏見である。そのうえまた冤罪。

夏油はこのとき初めて、決して語られることのなかつた五条の受けた屈辱というものの

を理解したし、彼のことを真実の友であると認識した。

カレーのためだと言えば微妙な顔をされたが、しじみが良いという話を夜蛾は語つてくれた。が、しじみのそれも亞鉛由来なので、夏油は穏やかに微笑んで拒絶した。

しじみに胃袋のスペースを明け渡す訳にはいかなかつたから。今はとにかくカレーを詰め込まねばならない。

何かを悟つた夜蛾は顔を覆つていた。太い指先が幾分か髪を乱していようとも、彼は顔を覆つたままだつた。

「すまない、不甲斐ない担任であるばかりに……」

この場合、誰が担任になろうとインドのハイ・カースト大富豪を黙らせられる気がしないので、落ち込む必要はないなんて言葉は、口に出さずに飲み込んでおいた。

呪霊玉と真実は飲み込んでお腹を壊さない。壊さないがストレスは溜まる。こうして夏油はまたひとつ大人の階段を登つた。

他にも煙草は味覚への影響があるようで、絶対に吸わないようにしようと決意した。が、問題は同期にヘビースモーカーが居るところだつた。

彼女自身は自分の身を回復する手段を持つが、夏油にはそれがない。ならば可能な限り防御に徹する必要があつた。彼は大手通販サイトから個人通販サイトまでくまなくアクセスし、これだと思ったものを購入した。そしてその品が届いた翌日、勝利を確信

し身に着けて登校した。

「スコー…悟、硝子。シユコー…おはよう…スコー…」

「? おは、んぐんつ! ぐ、んんん、ふふつ、ふひ」

変な音が混ざるくぐもつた声に疑問を持ち、顔を扉に向けて問題の人物を視認した家入は、我慢できない笑い声を漏らした。ここ最近の彼女は非常にゲラである。仕方がない。同期が揃いも揃つて冤罪やらダサい称号やらと、次から次へと笑いの種を突然にまき散らすからだ。しかも規模がでかい。

こういうニッチな学校に来て、同級生が富豪を助けた結果がこんなことになるなんて、入学前に想像つくなら占いとか未来予知で食つてくことにするに決まっている。

彼女はそんな技能もそういう系統の術式も持つていなかつたので、こうして突然の種まきにより、耐えようとして失敗した笑い袋になつてしまふのだつた。

しかも今回の種まきは、特級被害者の夏油がやらかすほうへと回つている。

亜鉛疑惑のときもかなり笑つたが、それでもこんな不意打ちを朝から食らつたりはしなかつた。

同期がゴーグル付きのガスマスクを被つて登校してきた。呼吸音シユコシユコ言わ

せながら。お前はいつから暗黒面に堕ちたのか。

「ぶはははははー傑! それ、それエ……! 対毒マスクじやんwwwwww」

「シユコー…そだよ…スー…」

「ベイダー卿とお揃いの呼吸音させんな wwwwwwww」

派手に撒かれた種は、五条の口から大量の草を発芽させた。

「で、どうしてベイダーごっこしてんの？」

ひとしきり笑つた後に五条は、このままだと笑いすぎて窒息死すると言つて、打ち上げられた魚状態になる前に夏油からガスマスクをはぎ取つた。少し釣り上げ直後のようには跳ねまわつた気がするが、痙攣と硬直は避けられた。

ちなみに、はぎ取る際にちよつと抵抗されたのが、余計に呼吸器に問題を与えてきたが、なんとかなつた。腹筋を試されすぎた家入は、比較的非力なのも手伝つて咳込みながらもなんとか息を整えるのに忙しそうだつた。

「ダース・ベイダーじゃなくてだね……実は、味覚の保護を行おうと思つて」

「味覚の保護お？」

「ほら、煙草の煙とか。そういう味覚に影響がありそうなもの全てから舌を護りたいんだ」

「呪術師なんだよな？ソムリエじゃなくつて」

正論嫌いを公言する五条に、とてもまつとうなつっこみを入れられたが、カレーとい

うかマスタルに洗脳され切つてゐる夏油にとつては小鳥のさえずりのようなものにしか聞こえなかつた。

「はー……クズに合わせて禁煙なんかしないよ」

「それは個人の嗜好だから、禁煙を強要するつもりはないよ。ただ、喫煙は味覚を狂わせるつてきいて。副流煙や残留物質がどれくらい味蕾に影響を与えるのかが分からぬからね。念のために被つていたんだ」

ようやく息を整え終えた家入が禁煙しない宣言をしたが、夏油はそれについては無理強いしなかつた。年齢で言えば法律違反ではあるけれど、あくまで嗜好品なので。

「でもそうだな……代わりに協力してくれないか? ズつとじやなくていい。今日の昼、私の作つたカレーを食べて欲しい」

「……なんか指先黄色く染まつてのつて、」

家入の指摘に夏油は少し照れながら、指先を遊ぶように絡ませながら返答した。行動がとつても乙女なのを、家入はスルーすることにした。直感が言うのだ。これは前座に過ぎないと。

「実は、調合中にうつかり触つてしまつたターメリックの色が落ちなくつて」

「ヒイ www ターメリック傑 www www」

「悟はこれ以上、私に妙なあだ名を与えないでくれ……」

やつぱりあの指遊びは前座に過ぎなかつた。

深刻なゲラ化が激しい家入はターメリック傑で撃沈した。せつかく復活したというのに、もはや痙攣しかしていいない。

「た、たー、ターメリック傑が、つ、ぐつ、食べてつて言うなら、……ハア、た、食べる……」

「E a t c u r r y」

「……ヒツ、フ、へへへ……カリ……フ、フフツ……食べる……」

「傑おまえやつべーぞ、あの富豪に何されたんだよ、落ち着けつて。な？」

五条は親友の将来と教室内の空気に不安を感じ、かつてない程ホームルームが恋しくなつた。

先生早く来て。なるほどこれが人に頼るという感覚。彼も入学して他者と関わるようになつて、かなり成長したのだつた。

そうしてやつて来た昼休み。カレーを自室まで取りに行つた夏油をよそに、家入と五条は妙な緊張状態に襲われていた。

「なあ。あいつ、飯とか作れんの？」

「作れないならカレーなんて作らないでしょ」

「そなんだけど。そなんだけど……」

五条の言いたいことはなんとなくわかる。市販のルーから作るカレーなら、子どもでもキヤンプやお手伝いやらで手を出したことがある、失敗しにくい料理のひとつだ。

だけど今回は調合からやっている。正直とても怖い。

「お待たせ。鍋ごと持ってきたよ」

「鍋」

「やめて……もう笑いそう」

鍋ごとと言ふわりには他の荷物も多い。なんか背負つていて。

「その、背中のやつは……？」

好奇心の塊かつチャレンジャーである五条は聞かずにはいられなかつた。

「これ？家庭用ナン窯」

「ナンここで焼くつもりかよ！」

「ん、ンンンっ」

もう滅茶苦茶やる気である。

笑う同期を放置した夏油は調理用の使い捨てビニール手袋にアルコールを吹きかけ、起動させて温めておいた窯でどんどんナンを焼いていく。

一緒に持つてきた皿やウエットティッシュを配り、金属製の器にチキンカレーをよ

そつて、本格カレープレートを提供すると、自分の机の上にも同じものを置いた。

「いただきます」

「…いただきます」

「いただきまーす」

三者三様の挨拶のあと、夏油はぱくぱくと食べ始めた。その間やたらと紙質が良くて分厚いメモ帳に、一口食べるごとに何かを熱心に記入している。とても研究熱心な姿だ。だが忘れてはいけない。彼はカレー研究科でも料理評論家でも忍者でもない。呪術師である。

香りは正直とてもいい。意を決して食べると、普通においしい。

「うまいじやん」

「うん。イケる」

「これじゃ、駄目だ。これでは理想の味とは言えない」

「えっ」

まさかの本人が否定。いや美味しいって、どこ目指してんのか突っ込まれつつ、夏油は前髪を振り乱した。額にペしペし当たつていてるけど、気にならないのだろうか。家入は現実逃避にそんなことを考えた。こういう思考回路になつてしまつてているあたり、彼女の笑いへの耐性が気になるところである。

「クミンをもう少し……いや、ここはココナツツミルクを2m1減らして……」

「すぐるがとおい。どつかいっちやう」

「幼女になつてんぞ」

こうして手作りカレーを振る舞う場は、五条の幼女化と夏油の深刻さが浮き彫りになつて終わつた。なお、教室でカレーパーティーを開くなど怒りに来た夜蛾は、特別に用意されたチキンカレーとチーズナンによつて、今回の買収されたが、五条の幼女化デバフの解除には付き合つてくれなかつた。普段よりおとなしくて良い子だつたので、解除するメリットが見当たらなかつたせいだつた。

幼女は空爆疑惑やらお手付き疑惑を向けなくて済むし、やらかすときはやらかすけど壁クレヨンとかティッシュ乱舞とかの面倒だし大変だけど生き地獄にはならない。まあ、それをやりだしたら別の意味で悩みが深くなつて寝込んでしまうだろう。

実年齢は幼女じやないので、その辺の心配は必要ない。年齢に対する精神年齢は深く考えてはいけないが、きっとそういう本物の幼女よりはずつと上。

その夜、色々心配になつた五条は夏油の部屋を訪れた。名目はゲーム、内実は偵察。結果、シンプルで清潔感がある部屋は、謎のスペースが詰まつた瓶が壁の一角を占拠する、さながら実験室になつていた。むしろパーテーションで私生活部分が向こうへ追

いやられていた。

ここは寮の部屋だつた？泊りがけの研究者が暮らしつつ研究してゐる研究室じやなく？それとも理科室？呪術高専の寮というカテゴリーからは、あまりに乖離した部屋に模様替えされまくつていて、とつても困惑。同じ間取りに自分が住んでゐるなんて思えない。そしてあの棚。漢方っぽく見えるガラス瓶に納められたモノが異様な存在感を放つてゐる。耐えきれなくなつた五条は聞いてみることにした。

「……まあ、棚のこれつて、スペース？」

「そうだよ」

やつぱりスペースであつた。五条は僅かな可能性とはいへ、もしかしたら漢方的なあれそれかなつて期待してたし、漢方なら漢方でそれも頭を抱えるけれど、スペースだつた。スペースも薬効があるとはいへ、特化しすぎている。

「傑、なにこれ」

「これはターメリック」

「こつちは？」

「コリアンダー」

「これ、「チリペッパー」

「カレーの材料……だよな？ なんでこんな事して……？」

夏油は沈痛さがにじむ顔で、深く息を吐き出した後に理由を語つた。

「……好きな調合を探してくるようについて、宿題が」

「あのインド人とどんな関係なんだよ」

「続柄なら他人だよ」

「そうじゃねえ。おれだつて あのおじさんとは たにん」

結局ガサ入れは、突入班が幼女となつてしまつたことで終わつたが、ゲームは追いやらされた生活空間で一時間だけやつて帰つた。とても良い子。

道を外していく

五条と夏油は任務を言い渡された。星漿体の護衛と抹消。それが彼らに課せられた任務だつた。

「すみません、この任務辞退します」

「まずは理由を話せ」

天元様からの指名だというのに、夏油はあっさりと任務の放棄を言い出した。嫌な予感しかしながら、夜蛾は理由を問うた。

「護衛がどの程度の時間必要なのか不明なので……現在、煮込みの火力と時間について調べているので、長時間ここを離れるわけにはいかないんです」

「……それは、帰ってきてからやれ」

「今やっているんです」

「帰つてからやれ」

「傑、いいこだから、任務受けよ?」

そう幼女に諭されてしまつては受けない訳にはいかなくなつた。

最近の五条はカレーの絡んだ夏油限定で幼女化する。とても良い子になるので、夏油

をマスターとカレーの生贊に捧げることで召喚される幼女のことを、夜蛾はとても重宝していた。夏油もその二つが絡まなければ問題は極端に減る。

と、いうわけで護衛任務である。

色々あつて千切つては投げ千切つては投げをした後、学校行きたいの流れで待つたを掛けた男がいた。ターメリックに染められし男・夏油である。

「待つてくれ、その案こそ飲めない。私には時間経過で味がどのように変化するのか見極めるために寝かせてあるカレーがあるんだ」

「カレーだと!!」

「え、もしかしてこの子カレー好きな感じなの?」

「ど、どこにカレーがあるんじや……? それはひよつとして、美味しいやつなのでは……?」

「いや、傑のカレー美味しいけど」

「高専行きます」

学校通いは中止となつたが、問題もある。このまま馬鹿正直に高専まで行つてしまふと、ホイホイされた暗殺者が山のようにやつてくるし、きつと道すがらトラップももりもりある。

どうしたものか、と悩む五条を横に、夏油はおもむろに携帯を取り出し、どこかに電

話をかけ始めた。

「もしもし、私です。いえ、忍者ではありません」

五条は電話の向こうの人物を悟つた。

「実は師匠にお願いがありまして」

親友がインド人に弟子入りを果たしていることも知つてしまつた。この前は続柄は他人と言つていたのに。いや、一応続柄は他人で正解だが、どこか納得できなかつた。「ヘリを一台、回して頂けませんか?」

ドストレートに権力と財力を私情で動かす親友を見て、富豪を味方につけたうえに図太くなつた男は違うなと、自分も権力財力家柄と文句なしのものを所持していることを棚に上げて、五条は空を仰いだ。ああ、雲が流れていく。あの雲の形、なんかたい焼きっぽくていいな。

そうして雲の形で逃避していると、さつき要請したばっかりのはずのヘリがもう來た。

とても嫌な予感がした。なぜなら、ここからほど近い場所に、『基地』があるからだ。どう見ても普通のヘリよりもでっかいけどヘリ。迷彩色に塗られてるやつ。

陸自の大型輸送ヘリ・CH-47J通称チヌークである。ちなみに操縦士2名、機上整備員1名+55名が乗ることが出来る。

「……傑」

「……いや、その……。流石にコレが来るとは、その……」

「傑。おまえ、あのマハラジヤのことナメてんの？あんだけ貢がれてた癖に、こうなるつて予想付かなかつたの？ねえ？」

そんなやり取りなぞ放置した護衛対象はといえば、

「す、すごいぞ!! ヘリコプターなんて初めてだけど、あんなにおつきいのか!!」

「いえ、あれは輸送用のヘリコプターです、お嬢様……」

大はしゃぎだつた。出来ればそちらに混ざつて一緒にテンション爆上げで盛り上がりたい五条であるが、とりあえず軽率な行動をしてかした親友を窘めなければならぬ。幼女はおともだちが間違つたことをすると、ちゃんと止めるからだ。

五条の幼女浸食率は平時でもだいぶ侵攻していた。

「あーもう！こんなへり、俺も初めてだわ!!」

でも好奇心には勝てなかつた。だつて、日本に約15機しかないヘリコプターだつたから。

たぶん色々やつてはいけない手段で要請され、しかも派遣されてしまつた氣の毒な自衛隊員たちの目を見ないようにしつつ、全力で貴重な旅を満喫することにした。

世間のみなさん、自衛隊員のみなさん、防衛省のえらいひとたち。みんなごめんなさ

い。

そう訴える内なる幼女の声は、ノリ方面に舵を切つた五条本体になんの影響も与えなかつた。

高専のグラウンドまでの遊覧飛行というかなんというか、輸送された4名は、そのまま顔色の悪い夜蛾に連行されていつた。

向かつた先は特別室。マスターがよく来るせいで作られた、機密性の高い貴賓室（広い）だ。

「はあ？ 同化がなくなつた……？」

「ああうん、そういうよな」

夜蛾はこめかみを抑えながら五条の問いに応えた。だつてじやあこの任務は一体、何だつたというのか。

「マスターと天元様が遭遇してしまつて……カレーを食べる仲になつたんだ。その流れで、天元様がマツサージを受けて……何故か安定した」

「えつ」

カレー食つてマツサージ受けたら天元様が安定した。全員言つてゐる言葉は分かるのに、理解が出来ない。脳が拒絶している。

「え、でも肉体の情報を書き換えるのに適合する人間と同化する必要があるつて……
言つてたよな？」

「そうなんだがな、そudadつたはずなんだがな、ちゃんと若返つたうえで安定した」
「…………え、カレーとマツサージで…………マスターなんかの術式持つてた…………いや、い
つ見ても無かつたぞ…………？」

混乱するのも致し方ない。マスターは正真正銘の非術師である。血筋的には過去に
なんかすげーこと出来るやつ桦で嫁取りやらしたことはあれど、危機を察知する程度に
しかその血も残つていない。つまり窓以下。

というかこの場合、マスターがどうの、インドがどうのこうのではなく、カレーとマツ
サージで若返つたうえに安定して見せた天元様がすごい。

ちなみに、インド的には人間を含む身体の部位が多い生き物は神様扱いをするので、
初対面の天元に対しても目が多い＝神様みたい＝めでたいという式が成り立ち、出会い頭
に「目が多くて、おめでたね？」と、受胎告知じみた発言を奴はした。

言われたほうは一瞬固まつたが、外国人なので言い間違えたのだろうとスルーした。
長生きしているだけあって、なかなか肝が太い。
だけど、そいつは日本語ペラつペラな癖に、周囲のインド人への妙な期待と混乱を生
むためにわざと変な喋り方をしているだけである。

「え、じゃあ、私つて…どうなる、の？」

「……天元様が安定なさつたことは広く告知するが、狙われ続けることに変わりはない。
そこで、その。夏油」

「……。嫌です」

「そういうな」

「今日、既に私はやつてしまつたんです。やつて、しまつたんです…!!」

だが一度も二度も同じだろうと、本日二度目のお電話を掛けることになつた結果、天
内と黒井はインドのマハラジャの離宮で3年ほどホームステイすることになつた。

「ステイ先が新築された宮殿なんじやが……」

後日、そんな国際電話が夏油のもとに掛かつてきたが、きっと彼女たちが良い子だつ
たので気に入られたのだろうと夏油は思つたし、割と正解だつた。

彼は慈善事業にも篤い男だつたので。

星漿体だつた少女はいま、インド領で歓待生活を堪能中である。

夏油はそんな彼女が快適すぎてそつちに永住してしまわなか、少し心配している。

こちらのカレーは、あちらの先輩から新入生へのサービスです

春が来た。仲良くそろつて二年にあがれば、後輩となる新入生が入学してくる。つまり、歓迎会だ。

「いやだからって、カレーばつか用意すんのなんなの？お前血液までターメリックになつたの？」

「カレーが嫌いな人間などいない」

「いや、どつかにいるだろ。暴論だぞターメリック傑」

いよいよ妙な名づけにも反応を示さなくなつた夏油に対し、五条の心配は尽きない。

入学当初は割と情操教育的な部分を夏油が担つてきた気がするが、親が頼りないと子どもが大人になるというアレが起きたのか、五条はかなり夏油とカレーについてはまともになつた。突つ込みが不在というのは危険だとということを学んだし、いざというときブレーキは宛にならないということも学んだ。ゆっくり減速して複数回ブレーキを掛ける。これが大事。でも現状、何回ブレーキ掛けても停止してくれないし、夏油の近くにはアクセル全開のおっさんがいる。

ここでアクセルを全開――

いや、あれは誤字というか誤植というか。インド人を右に置いても置かなくても、インド人自身がアクセルを踏んづけてくる。お陰で夏油は止まらない。五条はブレーキの大切さを間近で感じているものの、最終手段サイドブレーキの存在は知らなかつた。この場合、五条家の力をすべて使つてでもクミンやコリアンダーから手を切らせることを指す。マスターは治外法権的な存在なので無理。一番引き離さなきやいけないのに一番難易度がえつぐい。

さてそんなあつたであろう本来の姿とかけ離れた夏油は、誕生日に家入と五条の連名で贈られた黒いエプロンを身に着けて意気揚々とカレーの仕込みをしていた。鍋が三つもある。この男、やる気である。新入生を染まらせる気しかない。

このエプロンについてもひと悶着あつた。こんな歯止めが効かなくなるんじやないかとか、これは実質カレー免罪符ではないかとか。安心してほしいが、普通カレーの免罪符としてエプロンは成立しないし、エプロンを贈ること自体は悪いことでも何でもない。ただ、贈り先がカレーにトチ狂っているのが問題なのだ。

「うん、いい出来だ」

「あ。出来たのか」

「つまみ食いは駄目だよ悟」

「カレーは、あつくてどろどろしてるから、つまみぐい できない」

五条も五条で相変わらずたまに幼女化していた。五条家が総力をあげて何とかすべき事態は、夏油より嫡男の方である。この殺伐としまくつていて、常に誰かを陥れそうな人間が上にうようよしている業界で、次期当主がたまに幼女なのは流石に、不安しかない。心配せずとも飴ちゃんで懐柔なんて出来っこないが、なんかやれそうと思われるのがマズい。

「いい出来なんだけど……」

「いやもうそれでいいじやん。なんで納得いかない顔してるんだよ」「やつぱり、マスターのところのシェフには及ばなくつて……」

自分の腕前を、鍋を遊び道具に育つた五十過ぎた熟練プロ料理人と比較しだした級友に、五条は寂しそうな眼をした。彼は基本的に人好きの寂しがり屋なので、親友がかけ離れた場所を見つめ、あまつさえそこに向かつて邁進している姿は理解できなくつて悲しいのだ。

だつて呪術師としての友人だと思つていたから。カレー狂いは解釈違いである。

「大体、年季も違げーし、お前素人じやん」

「はつ、そうか。調理師免許」

「だめだ、もうだめだ」

五条は頭を振った。諦めの境地が垣間見えたが、気のせいだつたと思いたかった。

歓迎会は大盛り上がりした。米が欲しいという生徒もいたが、今回はナンで押し通した。まずはナンで食べる。これは譲れそうにないからだ。もう一人の方はパンが好きだつたようで、ナンも大変喜んでくれた。

そのおかげもあってか灰原には酷くなつかれた。カレーを察すると白米のみの握り飯を持つて登場するくらいには懐かれた。七海の方はカレー・パンの要求が激しいが、現在はハニーナンに陥落中なのでパンの開発は後回しでもよいという解答を得ていた。

つまり、夏油は七海によつて、さりげなく次の開発の予約を入れられているわけだが、それについても夏油は全く気にしていなかつた。彼のカレーへの追及は、理想の味だけで留まるようなものではなくなつていた。

五条が垣間見た向こう側に、夏油はすでに手を掛けていたのだ。とつても距離がある。

そんなこんなで二年生は意外と下級生と仲良くやつていた。五条もアレなところはあれど、たまに幼女になるので目を離してはいけないと知つてからは、そんなに邪険にされるることはなかつた。

「今日のカレーはなんですか!」

本日もカレーの香りを嗅ぎつけた、元気いっぱいなほうの後輩がやつてきた。

夏油はいきすぎたカレー研究のために生活空間の圧迫がひどすぎるため、使用料を割増しで支払うことで寮の隣の部屋をカレー部屋として使う許可を得ていた。

この許可を得るためにあちこちにカレーを配り、マスターの影をちらつかせたのは誰もが知る裏話である。もはや表。

「今日は私の師匠のところのシェフが来てくれたんだ」

「カレーの師匠ですか？」

「いや、人生の師。シェフは師匠のところの使用人だね」

夏油はオリンピック出場のかかつた大会中のアスリートなみの真剣さを滲ませた鋭い顔つきでいた。完全に味と技を盗もうとせんとする、挑戦者の顔つきであつた。

「お師匠様も来るんですか？」

「うん。むしろ、彼が来るから來てくれるになつたからね」

「へえ、お師匠様って凄いんですね！」

「ああ。高専十年分の運営資金を上回る寄付をしてくれた人だからね。こつち（呪術界）も無碍にはしないんだ」

「無碍にしたくない相手なのに、自分から無碍にされに行くスタイルなせいで、上の人たちは今日も胃が痛い。ざまあみろ。」

はてさてそんなマスターであるけれど、今日も今日とて東京校のここは勘弁してくれ
という場所以外は好きなように闊歩していた。水曜日なので。本日はカレー部屋と化
した夏油セカンドルームにインしている。シェフも一緒だ。当然の如く出来立てのお
昼を食べる気である。このため本日のカレー自販機はひとつ枠が空き、戦争に勝利した
誰かがカレーにありついているが、そんなものはここでは関係ないので割愛する。

「よう若い人間。もうすぐ出来る、食べろ」

「いや、食べに来たには違いないんですけど……」

初めて顔を合わせる灰原がいるのととても通常運行。手振れ機能防止でもついてる
のかレベルでプレない。

「はじめまして！先輩のお師匠様！灰原雄です！」

「ニユーフェイスね。労働環境に新たな風！アイアムヨーガマスター。カレーを食べ
ろ」

「わーい！食べます、いただきます!!」

灰原は即時対応した。この順応能力の高さが頼もしい。夏油は後輩のポテンシャル
に感激した。ちゃんと今日も握り飯を持参しているのもポイントが高い。しかもめ
ちゃくちゃでつかい。多分平均の三倍くらいある。それを二つ持ってきてる。

灰原のこの食欲の高さはきっと、シェフが作るカレーの香りに因んでいるに違いな

い。てっぺんは遠いな。エベレストの峰を見上げる気分になつたが、彼が目指す頂は本來そこではない。ないが、インドカレーという暫定呪いに引つ憑かれてる現状、彼が目指しているのは自分を喰らせる至高のカレーである。

解呪条件が自分次第すぎて誰にも手出しできない。

マスターと後輩が架空の存在であるヨガフレイムについて語り合つてゐるのを微笑まし気に、後方祖父母面で見守つていた夏油だつたが、そうこうしてゐるうちに五条が家入と七海を連れてやつてきた。

「あー腹減つた。つて、おばあちゃん……？ちがつた、傑だつた」

「おば、おばあちゃん……おばあ、ヒヒツ・オバアチャン……ゲトウオバアチャン……ふ、あはははは」

七海が不安そうに先に入室した先輩二人を眺めている。幼女混じりの最強とゲラな医者志望。これがここでの先輩。特に家入の笑いへの耐性の低さには恐ろしいものがある。是非とも治療中は封印されていてほしい。手元のブレ防止が搭載されているようには見えないので。

そういう彼の手にもヒヨコのおもちゃが握られている。

本来はアヒルの、お風呂に浮かべるアレであるが、これはマスターがヒヨコと称して彼に贈呈されたのでヒヨコなのだ。あと、おもちゃにしか見えないが立派な呪具であ

る、らしい。当然の如く五条の嘘なのだが、マスターが与えたものなせいで、もしかして：本物疑惑が彼の中からぬぐえず、こうして常に持ち歩いていたのだつた。

なお、効果としてはストレスを軽減させ、常に落ち着いた行動が取れるようになる精神作用系補助呪具である。嘘だけど。でも本人含め周囲までそれっぽく思い込んでいるせいで、最近マジでその効果を獲得しつつある。不特定多数の呪術師による祝福という名の呪いである。

五条は見かけるたびにマジで呪具になつていくヒヨコのおもちゃに、実は素材の中にやべえもんが仕込まれているのではと、嘘から出た真に戦々恐々としつつ内心爆笑している。任務にも連れていくとか相当。

なお討伐中は尻ポケットにねじ込まれている。顔だけポケットから出ているので、とても愉快な光景。たまに生地と尻の筋肉に潰されてガーンと鳴く。尻ポケットの中で。とつても緊張感が抜ける。

そんな様子は確かにストレスというか緊張感が軽減されるが、落ち着いた行動に繋がるようには思えない。が、本人はおおむね満足しているし、愛着も沸いているようなのでそのままだ。呪術師ほんとみんなイカレてる。

「先輩方もこの部屋に集まるには狭くって」

夏油はすんなりと嘘をついた。単純に呼ぶのが面倒だつたのと、取り分が減るのが嫌でスルーしただけである。こういうところはなかなかに呪術師してるので、五条もニッコリである。

こうして第8回全日本呪術高専印度咖？評定会が始まつた。8回とか言つているけど、実際にはカウントされていないし、会の名前も安定していない。前回の名前は俺とお前とカレー部屋だつた。滅茶苦茶適當。

みんなで美味しい美味しいと言いながら食つていると、突然焦つた様子の夜蛾がやつて來た。

「1年は任務だつただろう!! 何をしているんだ!!」

バチギレして。そりやそうだ、よいこのお返事で大人しく任務に向かつたと思つたら、寮でカレパしてた。これは怒る。

「補助監督は腹を空かせたまま、ずっと待つっていたんだぞ!!」

「あ、いつけね」

「すみません、今日はハニーチーズナンがあると聞いていたので」

「正座しろオ！」

夜蛾 怒りの東京校アフガンが炸裂した。なお現場責任者として夏油が後始末をする羽目に

なつたが、カレーを惜しむあまり飛んで現地に赴き、道すがら目的外だつたけど使えそ
うなクソマズ産土神を丸めて食つて速攻で帰り、口直しにまたカレーを食べた。
今日の夏油はカレーときどき呪霊玉の食事だつた。だいたいいつもと一緒に。

離反と忍殺と新作カレー

ある日特級呪術師である九十九由紀がやつて來た。海外をブラブラしていた呪術師だ。

出会つたその日のうちに女の趣味を聞いてくる、合コンでも酒が回つている状態じゃないとなかなか飛び出てこないタイプの質問である。あと合コンであつてもなかなかNGだ。

「……スペイスの栽培が出来る人となら、うまくいけるんじやないかと」

「は？」

「私は極めるなんて終わりを定めることなく、カレーを求めるに決めたんです」

「え、なかなか狂つた理由。いつの時代の求道者？生まれる時代ざつと五百年ほど間違えてない？」

九十九は割と本気で青少年の将来に不安を覚えた。

いくら方針というか思想が合わないとはいえ、高専生狂いすぎ。なんでカレーの限界を超えようとする人材がいるのか。どうして誰も止めないのか。術式がカレーだつたりするのか。術式カレーってなんだろう。イリーガルな感じの粉ものだろうか。幻覚

とか多幸感とかもたらすやつ。

いや、カレーは美味しいから幸せにはなるけれど。なるけど。

もてなしの挨拶としてカレーを振る舞われた九十九は、こいつ変わつてるけど良いやつじやん扱いをし、いい気分になつたので悩みがあれば聞いてやるかと、とても寛大な気持ちになつていた。

だつて美味しかつたし、仕事しろとか高専の方針がどうのとか言わないし。ついでに正しい性癖というか、好みというか、若者らしく恋のお悩みとか聞けちゃつたら、何年先でも弄れるネタが手に入るとかそういう理由だつた。九十九的には、三年から五年経つたあたりにあの頃こんな事言つてたよねと弄るのがいい。相手のしょっぱい顔がとても楽しみ。

「悩み……実は、海外に出たいんです」

「いいね！こつちも助手が欲しかつたところなん」「インドにカレーを極めに」え？」

「インドの滞在経験は？ビザ関係はどう……いや、安全な食糧が手に入るマーケットや、調合に適した物件……それよりも建てた方が……建材の安全性を考えたら……」

「心がすでにインドにいる」

九十九は自分の力不足を察し、通りすがりの夜蛾に「あいつカレーの呪いにでも掛かってるの？解呪しないの？」と軽い気持ちで問うて夜蛾を泣かせた。いーけないん

だーいけないんだー。

お土産に冷凍ナンを貰つた九十九はこれ以上スパイシーな世界に染まる面倒を察し、さっさと去つていつた。

だが、インド亜大陸に夢を見る男の情熱を、この特級呪術師はナメていた。

翌日の出来事である。

なかなか教室にやつて来ない夏油を迎えて行くよう指示された五条は、鍵の掛けられていらない部屋が妙に片付いていることと、机の上に置かれた手紙に気が付いた。まるで果たし状か遺言書かとでも言いたげな重い空気があの白い紙から漂つていて。とつても近寄りたくない。

でも太くて立派^ハな、太字油性ペンででかでかと書かれた宛名が自分のもの。コイツが悟つて呼ぶのは自分以外居なかつたはず。いや、知らないだけで悟つて呼ぶ友人知人が他にもいるかもしれない。五条は儂い希望を抱いた。

でも呪術界で同名の人間は居ないし、呪術高専に置いてあるつてことは、寮にあるつてことは。そう、五条宛の手紙である。

五条は嫌々机に近づき、渋すぎる気持ちで手紙を広げた。

『悟へ

ミリグラム単位の調合を可能とする、無風状態を作れる呪霊の噂を聞いた。

探して来るので探さないで下さい。 傑』

「?、……??」

とりあえず訳の分からぬ置手紙を持つて教室に戻り、手紙を仲良く回し読みした。が、何度も読んでも呪いの気配も無ければ文章が変化する事もなかつた。

「あいつ何がしたいわけ？」

家入は本日は笑わずに素直に呆れた。ここまでトチ狂つてるとは思つていなかつたので、驚きが笑いを上回つた結果、冷静になつたゆえの勝利だつた。

「しようこ、カレーツテ、むずかしい？」

「……」

「こつちみて」

「カレーヌー●ルでも食つてろ」

「そうする」

保護者不在のまま幼女になつてしまつた五条は、カレーヌードルを購入しに教室を去つていつた。

これが、夏油傑の置手紙による抜け忍騒動（誤解）である。

噂は即座に広まつた。ニンジャニンジャと言われていた過去がほじくり返され、忍者が里（呪術高専）を裏切つただの、例のボタンに横一文字の傷を入れてゐるだの、印度

にある他の里に逃げただの色々、それはもう滅茶苦茶色々言われまくつた。ネタとして大層平和的で面白かつたので。

そりや、誰かの脚が飛んだだの、誰かが遺髪も残らなかつただのという暗くてつらい話が蔓延る世界だ。噂をするなら面白おかしい話のほうがいい。

だがもし本当に離反していた場合、自分たちがニンジヤスレイヤーと化すことになるという部分からは、みんな揃つて全力で見ないふりをした。

やるとしたら五条がやるはずだし、五条悟版忍殺はそれはそれで別作品っぽくて面白うだな、なんて。みんな本当に離反が起きていると思つていないので滅茶苦茶余裕だった。

しいていえば、みんな美味しい新作カレーを期待している状況。カレーに浸かりきつてているのは、なにも夏油だけではないのだつた。

その頃の夏油は無風状態という調合と卓球の試合にとても役に立ちそうな呪霊の入手のために右往左往していた。全国津々浦々をである。だつてあくまで噂でしかなく、ソースに確たるもののがなかつた。そいつあ四国の山の中だぜと言う話も聞いたし、輪島の海でフグ漁の邪魔をしているとも聞いたし、山梨の桃農園にいるとかいう話も聞いたし、秋田で囲炉裏を囲つているとかも聞いた。

味覚への刺激のために、愛媛で青いみかんを食べた後にふつかふかのタオルを買ったり、輪島でフグの一夜干し定食と朝市でまんじゅうを食べたり、山梨で助けたおつちゃんと、こつそり樽から出来立てワインを飲ませて貰つたり、秋田できりたんぽを食べた後にいぶりがっこを買つたりした。どれも素晴らしい味であつた。

かなり満喫してゐる。

そんな噂に流されてゐるのかただの観光なのか、はた目にはちつとも違いが分からぬ旅を、今まで散々稼いできた金と、尽きることなく湧き出るマハラジヤ資金にものを言わせて行つた。

たまにマハラジヤ自身も楽しそうだと合流することもあつたが、大抵が一人旅であつた。

今日はマスター参戦日であり、師弟揃つて仲良く出雲で蕎麦を啜つていた。マスターは蕎麦を啜れずに箸に麺を巻き付けようとして失敗していたので、夏油は店の人に頼んでフォークを持ってきてもらつた。子ども用の小さいお椀もセットで。お店の人は気を利かせてトングもつけてくれた。流石観光地、対応が手慣れている。

これで夏油はつきつきりでマスターの世話を焼く必要がなくなり、店員の親切心に胃袋と心が嬉しくなつた。

代わりに存分におかわりさせてもらつた。現在割子はすでに9枚目である。とても

美味しい。いい食べっぷりにお店の人もにつっこり笑つた。

「オメー学習をしろ」

「え？」

11枚目の割子に手を付けていたとき、食べ終えたマスターがお茶を飲みながらそんなことを言い出した。

「お前G A ● K Tだろ。勉強をしろ」

「学徒のほうです。今は学生つていわれることが多いですよ」

「ソナノ？ どつちでもイイヤ。あれだ、出席日数つてやつ、あるだろ。学校に行け」

「あ」

すっかり美食を巡る旅を楽しみまくついて忘れていたけれど、色々一般的な定義の学校とは違うけれど、流石に休みすぎるのは駄目だろう。旅行ついでに呪霊もぶん殴つているので事後報告ではあるが報告も入れてているし、倒した分だけちゃんと残高が増えていたので気にしていなかつたが、確かに一応は学校なのでずっと留守という訳にもいかなかつた。出席日数に関しては、各々任務があるためゆるゆる設定だけれども、それでも出なさすぎるのは不味い。

「次九州だろ？ そしたらトウキヨーまで遡上しながら帰れ。静岡寄るときは呼べ。マスター桜エビ食べたい」

「鮭じやないので遡上じやなくつて上京です。そうですね、九州を一周してから戻ります」

とはいえるゆるなので、マスタルも夏油ものんびりルートに異存はなかつた。どうせ追試なりなんなりを後からすればオーケー程度の一般教養なので、それくらいなら余裕だつた。

そんなこんなで九州を思いつきり堪能した後、主に太平洋側を通りつつたまに内陸部に浮気しつつ東京へ戻る途中、辺鄙な地図にもない村へ寄つた。そこは幼女（本物）を閉じ込めているクソヤバイカレポンチしかおらん、出来れば親戚とかに居て欲しくないタイプの住民しか居なかつたので、極力関わり合いを持ちたくなかつたが、目的の呪霊がいたのもここだつた。

幼女だけなんとかしてトンズラする氣でいたのに、目標がここにいる。エンゲージしてしまつた。向こうもロックオンしてる。思いつきり目が合つた。ここで会つたが百年目と言わんばかりに、夏油はさつさといただきますをした。とてもまずい。とてもカレーが恋しい。旅の途中であちこちカレーも食べたが、呉の海軍カレーは大層美味しかつた。はやく寮に戻つて経験を活かしたい。

なのでマスタルに頼んだ。もう頼ることに遠慮というものがない。相手は動く国家

権力というかひとり国際勢力である。正義の鉄槌ならば無茶ぶりに振り回されている日本の偉い人たちだつて無碍にはしない。というか、無碍に出来たら陸自からヘリを動かしたりしない。

村民は幼女二名を虐待出来ても国家には無力で、あつきりお縄につきつつ、ネタ切れの激しい怪異現象を特集している雑誌に、村ぐるみで幼女を監禁して宇宙と交信を行っていたヤツベエ新興宗教っぽいナニカに仕立て上げられた状態で記事にされた。たぶんマスターのせい。あいつが面白おかしく尾ひれ付けまくつて語ったに違いない。夏油は編集から金一封として図書カードを貰つた。図書カードはその後、調味料大全というマイナーな本の資金に化けた。

そんな夏油だが、幼女たちにここから出て自分のところに来るよう言つたとき、とんでもねえことになつていた。

「ここから出て一緒に行こう。美味しいカレーもあるよ」

ここまででは誰にとつても通常運転である。だが相手が悪かつた。相手は小さな女の子たちだつた。敗因はそれである。

「カレー？ あまいやつ？」

「王子さまのやつ？」

「甘口は……挑戦したことがないな。だけど、頑張つて作るよ」

「わあ！カレーの王子様だ！」

「王子じゃなくって、夏油傑っていうんだ。王子じゃなくって」
どちらかといえば限りなく王子っぽい出自なのはマスタルのほうである。外見は寸
借詐欺を繰り返していそうな怪しい風貌だが、マスタルはれつきとしたハイ・カースト
の家長である。あと夏油の親友もカテゴリ的にはそれについ。彼は風貌も王子様だが、
性格が魔王様である。

「カレーの夏油王子様」

「あれ？伝わった？伝わってない？」

こうして夏油と連れてこられた双子は東京校へと向かつた。

仕事はしても無断欠席には違ひなかつたので、担任からは拳骨を頂いたが、無風状
態で調合された完璧なスペイスでの甘口カレーは幼女三名に大変好評であつた。

なおここで幼女が増えているのには、もはや誰もつっこまなかつた。夏油の作った甘
口カレーは舌の肥えた五条も満足する出来であつたし、彼は甘いものが得意だつたの
で。

なお、忍者ネタに飽いた東京校の面子は、すっかりスレイヤーのことも抜け忍の事も
忘れ去つていたが、遅れてやつてきた噂により、呪詛師の面々には『東京に忍者がいる

が里を抜けたせいで、五条悟が忍殺しを請け負うことになつた』という合つてない話が事実として流布された。

呪詛師の面々は混乱したが、訂正を入れてくれる親切な人間は居なかつた。入れても入れなくても大した問題ではなかつたので。

あれから

世の中にはいろんな人間がいる。

どう見てもジョークチョコとかそういう類じやないのに、特級呪物を食べた人間とか。いつの間にか人生をカレーに支配された人間とか。とにかく、お前はどうしてそうなつたんだと言いたくなる人間がいる。

本日はその前者が入学してきた。後者は思つた。野良の指を食べるくらいだ、きっとお腹を空かせているに違いないと。なので寮時代のカレー部屋から移動と大型のアツプデートを経た現在のキッチンで、鍋をかき回していた。

ついでに美味しい美味しいタンドリーチキンも仕込み済み。国産ブランド若鳥の柔らかな肉にスペイシーさマツチし、噛めばうまみたっぷりの肉汁が溢れ出す、最高に美味しいタンドリーチキンだ。勿論お供にラッサーもある。レモンもわざわざ愛媛の専属農家から取り寄せた、無農薬有機栽培された手の込んだ逸品で作られたそれらは、人気過ぎて昼前には品切れになつてしまふ。今日はどちらも彼のために確保しておいたのだ。鶏肉に至つてはとつておきの名古屋コーチンを、ラッサーのヨーグルトと牛乳も野辺山から取り寄せた。さあ来い、お腹を空かせた若者よ。指を食べるほど飢えている

というのなら、私のカレーを食べろ——

その頃の虎杖は、五条に案内されながら校内を歩いていた。とはいえ配置が変わったりするので、中身の動かないところを主にではあるが。

その中で聞かされた話に、虎杖は度肝を抜かされた。

「え、どゆこと?」

「だからね、ここにはカレー屋は入ってるけど、購買はないから、必要なものがあつたら休日とか任務帰りに買うか、通販を利用してねつて」

「通販は分かるけど、カレー屋……?」

「うん、まあ。気持ちはとつても分かる」

虎杖はフレーメン現象起こしたネコチャン面を晒した。すぐ間抜けなしかめつ面。

「先生、なんで購買ないのにカレー屋はあんの?」

「……なんで、なんだろう?」

「めっちゃ悩む」

目が覆われていても分かるくらい、人生そのものについて試案している顔を五条はしました。悩みの深度が読めない。

「元々はインド国籍のおっさんが呪霊に襲われてて……」

「じゃあその人が?」

「僕の同期がやつてる」

「おっさんどこいったん?」

「都内のちょっと下町付近でマッサージ屋の店長兼マッサージ師やつてるよ。ちなみに大富豪だからそのおっさん」

「なんて?」

虎杖は自分が賢いとは思っていないが、それにしたつて暴力的な情報の多さである。

大富豪なインドのおっさんを助けたら先生の同期が校内でカレー屋を開くことになつたが、元凶は下町のほうでマッサージ師をしている。全くどうしてそうなつたのか理解できないし、経緯が想像つかない。

まさか同期がそんなおっさんに人生相談じみたことをしたせいで、色々なフラグとルートが破壊されつくされたものだということは、五条にも分からなかつた。なんなら懇切丁寧に説明されても納得しないだろう。

だつてここで彼はスペースに恋をし、カレーにすべてを捧げる男こそが親友なのだから。

「わ、マジでカレー屋が……」

「いらっしゃい、君を待っていたよ」

「なんでカレー屋なのにお坊さんの恰好なん?」

「今潜入捜査中なんだ。そこで違和感を持たれないとために、こういう恰好をしてるんだ」

夏油は袈裟姿に割烹着を無理矢理着てカレーを調理していた。

これを着るのにもひと悶着あつた。袈裟を着るなら日本式ではなく、インドから輸入するといって聞かなかつたのだ。結局インド産に満足のいくものが無かつたらしく、ネパール産の袈裟を個人輸入して試着していたところを学長に見つかり、もう生徒じやないのに何回目かも分からぬ生徒指導室行きとなつた。

そこに置かれていたのが現在の袈裟で、衣装は高専側が用意すると伝えてあつたのに、勝手に個人輸入したのは夏油である。だいぶイイ空気吸うようになつてゐる。毎日美味しそう。

「コイツがブツディストしてると偽物のサドウーに見える」「お、マスターいるじゃん。今日水曜じゃないのに珍しいね」

五条は慣れたものでマスターの向かいの席にさつさと着いた。虎杖も五条に倣つて彼の隣に腰かけて正面の怪しい風貌の初老の男を見やつた。初老というよりも老人のほうが正しいかもしれない。正しい年齢も正体も全く掴めそうにない。

「マスター? この人?」

「そだよ。アイアムヨーガマスター。マッサージ受けるか？それともカレーを食べろ」

「それとも?????」

虎杖は慣れないマスター節に早速やられている。死刑宣告を受けた時より不安になつて隣の教師を見てみれば、視線に気が付いた五条がさつきの話の大富豪だと教えてくれた。

その言葉に驚いてついまじまじと見てしまえば、しま●らかどこかのアーケード街の投げ売り品かと言いたくなるペラい生地のだっさいTシャツを着た、パチンコ屋の前で電話代を借りたいと言い出すタイプの駄目な大人にそつくりな表情をした人物がいた。富豪とは。

「どころでさ。サドウーってなに？」

虎杖はいいやつなので、マスターの不審者っぷりにはとりあえずスルーすることにした。たぶんきっと呪術界つてちょっとズレた人しかいない。とても正解を引き当ててはいるが、マスターはちょっと気配が分かつたり分からなかつたりする程度しか呪いを認識できない一般の非術師である。勝手に呪術界隈に踏み込んではいるものの、分類的にはとても一般人。

「修行僧。ニセモノが観光客相手に写真撮らせて金取つてる。ゲトウーもサドウーも偽物！」

「え、ええ……??」

「言われてるよ偽僧侶。ストレートに詐欺師って言われてるよ」

言われたほうも言われたほうで、とつても胡散臭い笑みを浮かべたまま酷いなあと
言つて銀色で横長の取つ手付きトレーを運んできた。持ち手のところの細工がとつて
も纖細。

虎杖にはそれが何か分からなかつたが、五条にはそれが純銀製の呪具であると分かつ
た。運んでいるものが零れない術式が掛かつて。なにそれめちゃくちゃ面白い。早
急に家入に教えなければならぬ案件である。きつと注射が打てなくなるレベルで
笑つてくれるはず。メスを持たせるのもよろしくなるだろう。

「はい、カレーとチキンのセット。干からびた指を食べるくらい食に困つているんだろ
う？沢山食べなさい」

「いや、ちげーから！呪力のために食つたの！」

お腹が空いていた訳ではないと叫ぶ虎杖を祖父母の笑みを持つて受け流し、テーブル
に並べていく夏油に対し、なんでこの人変な誤解してるんだと言いたげに隣を見て、
悟つた。

どう見ても滅茶苦茶笑うのを耐えてる。目隠してもバレバレ。絶対コイツが主
犯。

とんでもない業界に来てしまった。虎杖は改めてそう認識した。いきなり死刑が決定したり、頼りたい人が人のしたことを面白おかしく並べていた事実が発覚したり。先行きに不安を感じるが、とつてもいいにおい。我慢するのも面倒だし、きっとゲトウーさんは悪くない。

「ま、いつか。いつただきまーす！」

「たんと、おあがり」

「昔から思つてたけど、傑のそのキャラなんなの？」

三者三様ではあつたが食事が開始された。虎杖は初めて食べる本格インドカレーに感動したし、味も食べ慣れた日本式とは違うがとつても美味しくつて無我夢中になつた。

「凄い！こういうカレーツつて初めて食べたけど、めちゃくちゃ美味しい！ありがとう、ゲトウーサン！」

「ゲトウーソンwwwさんwwwwwwおいしいつてwwwさんwwwwww」

笑い転げながらもカレーを零さないあたり、五条は幼女時代にだいぶ躊躇られたようだつた。

最近では大分幼女も抜けて來た。その分ちゃんと成長したが、相変わらず精神年齢は若干幼かつた。

仕方がない、幼女時代から十年と少々しか経っていない。

「私はゲトウーじゃなくつて夏油だよ。夏油傑。ね？」

圧のある笑顔で訂正を求める夏油であつたが、マスターの『面倒。ゲトウーでいいよ』、マスターが許す』という言葉に全面降伏をした。

「マスターが許すならしようがない。ゲトウーでいいよ」

「わかつた！」

「お前のマスターへの信頼度が分からぬよ、僕」

そう言いながら次のナンを頼み、待つてゐる間にタンドリーチキンを食べる。これも拘りの名古屋コーチンとスペイスその他のお陰でとつても美味しい。このレベルの肉をタンドリーチキンにしてしまうのは勿体ない氣もするが、美味しいので放置する。美味しいものは正しい。何よりも。

「あ！」

「ふむ。随分柔らかい肉だな。これは鳥か？山鳥ともキジとも違うな」

「こいつ、勝手に俺のチキン食べやがった！」

「ふん。次を寄こせ」

「全部食うなよ。俺だつて食べたいんだから」

うつわ宿讐出てきた、めっちゃ食べるね宿讐。彼もお腹が減つてゐるんだね。掌に口

あるとつまみ食いしやすいデシヨ？

みんな言いたい放題である。

「あのね、両面宿讐。これは鳥ではあるけれど、きちんと管理された貴重な鶏の肉を使つた料理なんだ。君の時代ではここまで美味しい肉は無かつただろう？」

「それがどうした？もつと寄こせ。光栄に思うがいい、残さず食つてやる」

「あーもう、折角少年に食べさせたくつて仕入れた名古屋コーチンなのに……」

その言葉に虎杖は固まつた。名前しか知らないブランド鶏である。滅茶苦茶高い肉だ。知つてる。たつかいやつ。町内会長が酒の席で、昔いい店で食べたことを自慢してたやつ。

そんな肉がこんな、普通の食堂に無理矢理インドモチーフをくつつけた適當すぎる構内の食堂で出てくるなんて、予想できるはずがない。自分だつて調理するから、いい肉だつてのは分かつていたけれど、まさかそこまでいい肉だつたとか、予想外すぎる。確かに美味しいけど、スペイス塗れにするには勿体なさすぎる。

「人生初の名古屋コーチンが、タンドリーチキンだなんて……！」

「旨いから問題なかろう」

「ああ、ああそりやよ！お前の指とは比べもんにならないくらい美味しいよ！」

こうなつたらやけ食いだ。とことん食つてやる。食べつくしてやる。ゲトウーサン

は虎杖のために用意したと言つていたし、それなら食べつくしても問題ないだろう。五条も五条で遠慮なくぱくぱく食べているし。皿には山盛りあるし。

「ところでそこのジジイ。この肉に味をつけているものは何なんだ？そつちのドロドロした液体と似ていてるし、同じ調味料か？」

「なんだオメー、香辛料気にいたか。カレーが好きか？」

「ケヒツ、カレーか。美味いなこれは」

このとき、五条はなにかを予感した。夏油が道を大きく反れていつたときのアレに似ている。

このとき、夏油は確信した。自身の人生に大きく影響を与えたあの出会いと同じだと。

呪いの王が夏油に弟子入りし、カレーの王になるその日まで、あと——日。

おしまい